

■企画展

南部と伊達

会期 平成15年10月7日(火)～11月9日(日)

はじめに

広大な面積を有する岩手県は、県の北部と南部で方言や慣習などの差異を多く見ることができます。これは、面積が広大であるという理由ばかりでなく、江戸時代に県北部を南部氏、県南部を伊達氏が支配していたという歴史的経緯によるものが大きいと考えられます。

今回の企画展は、近世南部領・伊達領形成から戊辰戦争までを文化財を通して概観し、南部と伊達の相違点や類似点、対立と協力の姿を明らかにしようとするものです。また、南部家や伊達家に伝えられた華麗な美術工芸品を展示し、大名文化の粋をお楽しみいただきたいと考えています。

南部と伊達

現在の岩手県を南北に分断する形で南部と伊達が境を接することになるのは、豊臣秀吉の天下統一後のことです。秀吉の政策に反発した天正19年(1591)の九戸政実の乱平定後、北上川中流域が南部信直と伊達政宗に与えられたのです。

南部と伊達の境界は、奥羽山脈の駒ヶ岳から太平洋岸の釜石市桐浦まで、直線でも130kmに及びます。共に新支配地であったため、境界線の確定には大小のトラブルがあり、幕府の裁定を受けながら藩境に塚が築かれて一応の

決着を見たのは寛永19年(1642)のことでした。

その後、寛文4年(1664)に盛岡藩主南部重直が跡継ぎを決めずに没し、弟の重信に盛岡8万石、次弟の直房に八戸2万石を分割相続させたことから八戸藩が始まり、延宝9年(1681)に田村建頭が仙台藩62万石から一関藩3万石を分知されました。

南部と伊達の境

藩境は領地の防衛線です。盛岡藩は名族・八戸南部氏を遠野に移し、花巻には城を残して伊達領の拠点とし、仙台藩では水沢に留守氏、岩谷堂(江刺市)に岩城氏と、要害に伊達一門の大身を置いて守りを固めます。

また、盛岡藩は伊達領に11ヶ所、仙台藩は南部領に9ヶ所の番所を置き、藩境を越える人々や物資を監視しました。特に重視されたのは奥州街道の藩境にある鬼柳と相去(北上市)です。南部領の南の玄関口である鬼柳番所には、花巻城から交代で役人や足軽が派遣され、伊達領の北の守りである相去には、明暦2年(1656)に仙台から102人の足軽が移されました。

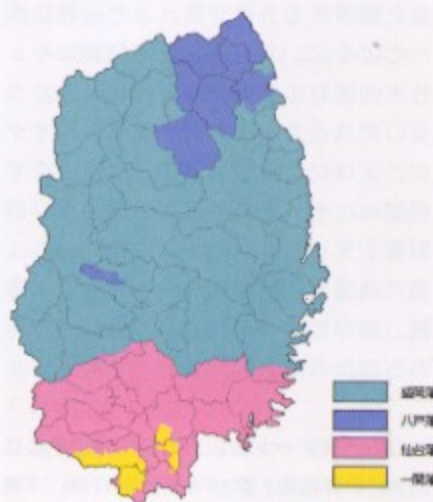
藩境が厳しく管理されていた江戸時代、盛岡藩と仙台藩の境がたとえ小道一つであったとしても、両者のコミュニケーションは少なかったものと思われます。

南部と伊達の間には差異が生じたのは当然の成り行きといえるでしょう。

南部と伊達の藩政

支配者が違えば、政治や制度も異なります。盛岡藩領は「通」という代官区に分けられ、代官が藩の直轄地である蔵入地の徴税や民政を担当しましたが、石高の37.5%を占める地方知行地は知行主の支配下に置かれました。仙台藩は上級家臣が直接給地を支配する地方知行制でしたが、知行主の徴税・警察権は制限され、蔵入地と地方知行地の区別なく、郡奉行が民政を指揮しました。郡奉行の下には各地に代官があり、その配下の大肝入が民政の実務にあたりました。石高制ではなく貫高制がとられていたことも特色です。

領地が違えば、収入源も異なります。南部領は江戸前期には産金が盛んで藩庫も潤いましたが、産金量が激減した中期以降は財政難と相次ぐ凶作に苦しめられ、銅と鉄、海産物が藩財政を支えていました。一方、米作地帯である伊達領では米が藩財政の機軸でした。仙台藩は屈指の大藩であるがゆえに格式相応の出費も多く、江戸時代を通して厳しい財政状況が続きます。享保11年(1726)からの買米仕法(藩による余剰米の独占買取)と幕府の許可を得た銭貨鑄造により息をつきますが、米



江戸時代の岩手県藩域図

清水秋全『増補行程記』(1751 盛岡市中央公民館蔵)
鬼柳(左手が南部領 板橋と扉のついた門柱、武具が並ぶ番所が見える。)

が支えであるだけにその後の凶作は深刻なものでした。

凶作や飢饉のため人口が減少して領内の労働力不足が問題となった仙台藩では、赤子養育仕法とよばれる間引・墮胎の抑制策を打ち出し、また、貧民に手当金を支給することで農民の他領流出も抑止しようとしていました。盛岡藩の施策としては、介護休暇の制度化が注目されます。

南部と伊達の至宝

南部家と伊達家に伝えられた武具や調度品の数々も展示の見所の一つです。

甲斐源氏の流れである南部家は、甲州以来の金や銀への執着を調度品はもとより武器・武具にも表現します。

他方、伊達政宗所用の黒漆塗の具足は、無駄な装飾を排した実践向きながら、弦月形の前立が際立ち、質実剛健さとともに「伊達」を感じさせるデザインとなっています。



金小札茶糸絨二枚胴具足
(館蔵 県指定文化財)



黒漆五枚胴具足
(仙台市博物館蔵)

表紙の「鶴蒔絵鼻紙台」は、安政4年(1857)に盛岡藩主南部利剛に嫁いだ明子所用のもので、明子は水戸の徳川斉昭の息女で、最後の将軍慶喜の姉にあたります。明子が南部家に嫁ぐ前年には、仙台藩主伊達慶邦が明子の姉八代姫を妻に迎えており、当時の政治情勢が伺われます。

南部と伊達の至宝は、両家の歴史やそれぞれの時代背景、藩主の政治姿勢

なども物語ってくれることでしょう。

戊辰戦争と岩手県の成立

徳川慶喜の大政奉還後、薩長を中心とする新政府軍と旧幕府擁護派との争いは慶応4年(1868)1月の鳥羽・伏見の戦いから戊辰戦争へと発展し、東北地方も戦乱に巻き込まれます。

京都守護職として尊王攘夷派を取り締まった会津藩に対し官軍から追討令が出されると、東北諸藩は会津の助命を嘆願しますが容れられず、反薩長の姿勢を強めた仙台藩を中心に奥羽越列藩同盟を形成。同盟には盛岡、八戸、仙台、一関と岩手県にかかわる全藩が加盟して官軍に対抗しましたが、戦いは敗北に終わりました。



一関藩戊辰戦争行軍図巻 (斎藤松子氏蔵)

盛岡藩は藩主南部利剛の隠退謹慎、20万石から13万石へ減封のうえ白石転封、仙台藩は藩主伊達慶邦の隠退謹慎、62万石から28万石へ減封、一関藩は藩主田村邦栄の隠退と3千石の削減となります。このとき仙台藩が没収された領地に気仙・東磐井・西磐井・胆沢・江刺の5郡が含まれ、後に岩手県が生まれる伏線となります。八戸藩は藩主南部信順が薩摩の元藩主島津重豪の五男であることから同盟への参加も消極的で、軍事行動を取らなかったことから処分はなく、朝敵の汚名も免れました。

白石藩主となった南部利恭は、版籍奉還により白石藩知事となり、後に旧地復帰が許されて盛岡藩知事となります。

明治2年(1869)の盛岡藩復帰直後の時点で、現在の岩手県域には盛岡・一関・八戸の3藩と、江刺・胆沢・九戸の3県がありました。維新以来、行政区画はめまぐるしく変わり、明治4年の廃藩置県まで「藩」と「県」の混

在は続き、「盛岡県」に代えて「岩手県」の名称が登場したのは明治5年、現在の岩手県の県域が確定したのは明治9年(1876)5月25日のことでした。



盛岡藩御貸具足
(館蔵)

幕末期、庶民からの徴兵用に盛岡藩が準備した具足。南部家の家紋の一つで現在の盛岡市章となっている「遣い菱」がついている。

終わりに

岩手県の誕生から1世紀をはるかに越える長い年月が過ぎた今、かつて厳然とあったはずの藩境は忘れ去られ、どこで線が引かれていたのかさえ曖昧な場所もあります。境塚の多くは失われ、南部と伊達を隔てるものは何一つありません。藩境を意識して暮らしている人は誰一人いないでしょう。

それでも時折語られる旧南部領(盛岡藩・八戸藩)と旧伊達領(仙台藩・一関藩)の地域性や気質の違い。皆さんはどのように感じられるでしょうか。

(専門学芸員 齋藤里香)

企画展「南部と伊達」関連事業

文化講演会「南部と伊達の女たち」

菊池慶子氏(聖和学園短期大学助教授)

11月3日(月・祝) 13:30~ 講堂

展示解説会

10月13日(月・祝) 13:30~

特別展示室

秋期博物館セミナー

10月11日(土) 13:30~ 教室

「南部と伊達の境~藩境絵図を読む」

時田里志(当館学芸調査員)

10月18日(土)

「伊達の絵画~政宗画像を中心に」

樋口智之氏(仙台市博物館学芸員)

10月25日(土)

「南部の美術工芸」

齋藤里香(当館専門学芸員)

11月1日(土)

「南部と伊達の明治維新~岩手県の成立」

菅野誠吾(当館学芸調査員)

※いずれも当日受付、聴講無料(解説会のみ要入館料)